

# 小浜市立図書館酒井家文庫蔵

山崎闇斎・浅見綱斎易学関連著述文献解題

西 田 智 子

## The Bibliographical Guide on Works Related to Ekigaku of YAMAZAKI Ansai and ASAMI Keisai

Held in Sakaike-bunko's Collections of Obama City Library

NISHIDA Tomoko

I have used Zhuxi's *Syuekihongi* (周易本義) as a material to study Eki. At that time, among the things I referred to, there was a book published by YAMAZAKI Ansai.

Therefore, in this article, I decided to collect and introduce the writings about YAMAZAKI and ASAMI's *Eki* (易) from Sakaike-bunko's Collection of the Obama City Library, which has a deep relationship with ASAMI. There are many of their literature, but among them, Sakaike-bunko is a venerable and valuable collection that inherits the academic tradition of Kimon school, and it has something you can trust.

In this article, I will publish all the writings about YAMAZAKI and ASAMI's *Eki* in Obama City Library, and add the necessary evidence to a new one. In addition, I would like to take up two books selected by Saiko of Korea, who has a close relationship with ASAMI's Ekigaku.

Keywords: Sakaike-bunko, YAMAZAKI Ansai, ASAMI Keisai, Ekigaku, Kimon school, Bibliographical Guide

キーワード：酒井家文庫、山崎闇斎、浅見綱斎、易学、崎門派、文献解題

### はじめに

山崎闇斎とその学派である崎門派の『易』に関する著述を調べると、闇斎については『周易本義』『易学啓蒙』『著卦考誤』『朱易衍義』を校刊する以外には、『文会筆録<sup>1)</sup>』に『易』に関する記述が残されて

---

1) 『文会筆録』は山崎闇斎がその生涯にわたる読書筆記を整理編纂したもの。日本古典学会(1978)『新編 山崎闇斎全集』ペリカン社に全二十巻ある。『文会筆録』七之一から七之三は易に関するものである。

いる。また崎門三傑の一人浅見綱斎の著述には『周易本義師説』『易学啓蒙講義』『易学啓蒙序講義』『朱易衍義講義』などがあるが、これらの文献については基本的な整理がなされていなかった。

そこでこの度、本稿において山崎闇斎と浅見綱斎の『易』に関する著述文献を綱斎と関係の深い福井県小浜市立図書館酒井家文庫蔵本の中から収集し、紹介することにした。彼らの文献は、他にも多数存在するが、酒井家文庫は中でも崎門派の学統を継ぐ由緒正しい貴重なコレクションであり、信頼のおけるものが揃っている。

闇斎については上記の朱熹『周易本義』や『易学啓蒙』などに訓点を施し出版したテキストが伝わっており、その刊本を使用して綱斎らが講義したものとされる。綱斎については、闇斎の講義を直接受けたものの一人として、筆記や師説、講義といった『易』についての講義解説が写本として数多く存在する。

筆者はこれまで朱熹の『周易本義』を中心に『易』を研究してきたが、朱熹の『周易本義』を読む上で参考にしてきたものの中に、闇斎校刊の和刻本『周易本義』十二卷序例一卷があった。これが本解題作成に至るきっかけであるが、そこから崎門派の易学を考察する必要性を痛感するようになった。崎門派の易学については従来まとまった研究がほとんどなく、そこで『易』関連の資料を収集するために小浜市立図書館に赴き、閲覧、撮影させていただいた。

ここでは小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』経部1易類（小浜市立図書館 1987：323-324）にある闇斎と綱斎の『易』に関する著述をすべて載せるとともに、必要な考証を新たに加えることとする。さらに綱斎の易学と密接な関係をもつ朝鮮・崔恒撰『易学啓蒙要解』二点についてもとり上げたい。

## 一、闇斎・綱斎と『易』

山崎闇斎は、諱は嘉（初めは柯）、字は敬義、幼名は長吉、通称は嘉右衛門、闇斎と号し、神道の靈社号を垂加という。元和四年（1618）十二月九日京都に生まれ、天和二年（1682）九月十六日京都に没した。

闇斎は最初妙心寺の禅僧となったが、土佐藩の執政の小倉三省や野中兼山と交わり、谷時中に朱子学を学ぶことで儒教に転向した。純粋な朱子学を学ぼうとする姿勢は、朱熹の号の晦庵から闇斎という号をつけたことにも表れており、朱熹の教説を祖述することに徹した。そのことは『闇斎先生年譜』に以下のようにある。

天和二年壬戌六十五歳…吾意朱子之学、居敬窮理、即祖述孔子而不差者、故学朱子而謬、与朱子共謬也、何遺憾之有、是吾所以信朱子、亦述而不作也、汝輩堅守此意而勿失

（天和二年壬戌六十五歳…吾意<sup>おも</sup>うに、朱子の学は居敬窮理にして、即ち孔子を祖述して<sup>たが</sup>差<sup>たが</sup>ざるものなりと。故に朱子を<sup>あやま</sup>学<sup>あやま</sup>びて謬<sup>あやま</sup>つは、朱子と共に謬<sup>あやま</sup>つなり。何の遺憾か之れ有らん。是れ吾の朱子を信じ、また述べて作らざる所以なり。汝が輩、堅く此の意を守りて失うこと勿れ。）（日本古典学会 1978: 410-411）

これはよく知られた語だが、弟子にも同じ厳格な朱子学者としての生き方を求めているのがわかる。闇斎は明暦元年（1655）三十八歳の時に正式に家塾を開き、『小学』から講義を始め、『近思録』『四書

集注』『周易本義』『周易程伝』へと進めていった。そのことは『闇斎先生年譜』に記されており、朱子学全般をもれなく学ぶと言うコンセプトのもと講義が行なわれたようである。『四書集注』の講義は道統の順番に従い、『論語』『大学』『中庸』『孟子』の順に行なった。さらに闇斎は「嘉点」とも呼ばれる『倭板四書』を出版していて、闇斎以前の博士家や五山に伝えられていたそれ以前の慣習的な訓読方法を改めることで、朱熹注の正しい理解が可能になるよう努めていた。また闇斎の講義の方法は、師説の伝承に重きを置くという意味から、一方的な講義形式の講釈という形を取ったとされる。

闇斎の経学関係著作は、刊行されているもののほとんどが朱熹の主著の校点かその表彰であった。延宝二年（1674）に『易学啓蒙』、延宝三年（1675）に『易経本義』（朱熹『周易本義』）、延宝五年（1677）に『朱易衍義』、延宝六年（1678）に『著卦考誤』が刊行されている。『易学啓蒙』『易経本義』『著卦考誤』については本文に訓点を加えている。また闇斎が自らの易説を記しているものとしては『朱易衍義』のほかに『文会筆録』七之一から七之三にいたる『易』の項がある。『朱易衍義』は朱熹の『文集』や『語類』から『易』に関する議論を抜き出したものであり、あわせて諸儒の説を引用している。『文会筆録』は一種の読書筋記で、経書や朱子学に関する重要な文章を抄録、編集し、評註などを付している。

浅見綱斎は、名は安正、重次郎と称し、承応元年（1652）八月十三日、滋賀県近江高島郡太田村に生まれ、正徳元年（1712）十二月一日に没した。享年六十歳。父の浅見俊盈は医を業とし、子弟の教育には熱心であり、長男道徹は医者、次男の綱斎は儒者の道というように父として子供たちの進路を見極め、それに必要な学問的環境を与えたという。その恵まれた環境において、綱斎は、延宝四年（1676）に山崎闇斎に入門し、佐藤直方（寛文十一年（1671）入門）、三宅尚齋（延宝八年（1680）入門）らとともに崎門三傑と称される。綱斎の入門の年代は延宝四年（1676）頃とされる。綱斎は闇斎の講義を受け継ぎ講義したといわれている。また綱斎の講義や師説などは、酒井家文庫だけでなく、名古屋蓬左文庫、九州大学碩水文庫などにも数多く存在する。

現在のところ、綱斎の著作として刊行されたものには『靖献遺言』などがあるが、『易』に関する刊行物は一点もない。ただし講義録は数多く残されている。いま日本古典籍総合目録データベース<sup>2)</sup>で綱斎の著述を調べると以下のようなものがある。著述名は五十音順に載せ、著述年が明らかなものについてはその年と綱斎の年齢を付し、小浜市立図書館酒井家文庫に蔵するものは請求番号を載せてある。ここでわかることは、綱斎の主要な易学関連の著述は酒井家文庫にほぼ収められているとみてよい。

小浜市立図書館請求番号 (酒井家文庫)	著述名	西暦	和暦	綱斎年齢
	一陰一陽講義	1710	宝永7	59
	易学啓蒙口義			
187	易学啓蒙講義（浅見先生易学啓蒙講義）	1700-1702	元禄13-15	49-51
178	易学啓蒙考証（繫辞伝参伍考証）			

2) 日本古典籍総合目録は、日本の古典籍の総合目録（一部、漢籍・明治本を含む）である。『国書総目録』（岩波書店刊）の継承・発展を目指して構築した、いわば「新国書総目録」ともいべきもので、古典籍の書誌・所在情報を著作及び著者の典拠情報とともに提供している。

	易学啓蒙師説			
183	易学啓蒙序講義（略）			
185	易学講習別録	1707-1709	宝永4-6	56-58
184	易学筆記／他（筆記／顕諸仁蔵諸用）			
	易経講義			
	易経本義講義	1704	宝永元	53
	易講義			
180	易師説（浅見先生易師説外題）			
186	易諸説	1679	延宝7	28
	易本義講義			
179	易類説			
	河図数生出講義			
	河図説			
189	繫辞伝参伍考証			
176	啓蒙著数諸図	1680	延宝8	29
174	啓蒙補要解師説			
	卦象集説			
	卦変集説			
182	卦変諸説	1680	延宝8	29
	原卦画			
189	著卦考誤著図辨	1691	元禄14	40
	周易筆記（易筆記）			
173	周易本義私考（浅見先生易経筆記）			
170、171、172	周易本義師説（易本義師説）	1704	宝永元	53
175	朱易衍義講義			
	朱易衍義講義略			
	朱易衍義師説			
	朱易衍義筆記附東山口義			
181	正義乾坤六子・変卦反对図・六十四卦相生図			
177	薛氏易要語			
177	薛氏画前易説			
	伏羲八卦図講義			
	洛書乗数筆記			

## 二、小浜市立図書館酒井家文庫総合目録（小浜市立図書館編 1987）について

小浜市立図書館酒井家文庫は、小浜藩主であった酒井氏の子孫である酒井忠博氏より小浜市に寄贈されたものである。それらの蔵本の巻首には「山口平姓蔵書」の角印があるものが多いが、これは山口菅山（1772-1854）の所伝本である。菅山は江戸時代後期の小浜藩儒で、藩校教授となり、江戸や小浜で教えている。

このほか「信尚館」の丸印が見られる。第二代小浜藩主酒井忠勝（1587-1662）以来、小浜藩は藩校の経営に尽力し、江戸の藩邸では、上屋敷に「信尚館」、中屋敷に「必観楼」、下屋敷に「講正館」が相次

いで開校され、山口春水（1692-1771）<sup>3)</sup>の子風簷（1741-1806）が教授となり、菅山、巽齋（1804-1858）と続いて藩邸学問所での講義がなされた。そのため、この「信尚館」での蔵書には「信尚館」の丸印が押印されている。また、これら江戸の藩校の蔵書であったことを示す「若州邸学」の印もある。「若州」は若狭国のことである。さらに「順造館蔵書」の印もある。これは小浜にあった小浜藩校順造館の蔵書印である（小浜市立図書館酒井家文庫総合目録 印記集 1987）。

以下、これらの酒井家文庫に蔵する闇齋・綱齋の易学著述のすべてについて文献解題を行なうが、その方針は次のとおりである。

初めに掲げた書名は、原則として酒井家文庫総合目録によったが、内題と外題に違いがある場合は外題を括弧書きで附した。次に酒井家文庫総合目録に記載される巻数、著編者、筆記者、刊行年・刊行者、書写年・書写者、請求番号をそのまま載せたのち、さらに漢文・和文の別、実際に数えた葉数、および刊本・写本の別を新たに加えた。

解題は、それぞれの著述につき、成立の経緯を示す見返の識語等の書誌情報については洩らさず記すよう努めた。漢文の引用については、読みやすさを考え、原文に適宜句読点を加え、そのあと訓読文を括弧内に記載した。また和文内の「くの字点」は使わず、仮名を記した。

酒井家文庫の刊本・写本の特色として、朱批・墨批の存在がある。朱筆で文字の右側に「や」の印を書き入れたり、棒線を引いたり、文字を○で囲んで『周易本義』や『易学啓蒙』『著卦考誤』などの本文内の語であることを示したり、行間に文字の校訂案を書き入れたりしている。さらに欄外や行間に朱筆や墨筆で誤字や衍字であることを書き入れて示す場合もある。このような朱批・墨批は、筆録された師説を、弟子たちが代々継承していく中で検閲、加筆訂正し、さらに正確を期そうとしたものである。これらは崎門派の講義録の特色をよく示すものであり、酒井家文庫が崎門派の学統の中で伝授されてきた由緒正しいものであることを示している。酒井家文庫の刊本・写本の特色は、『易』に関するものだけでなく『家礼』などにおいても同様の特色がある。綱齋は『家礼』などにおいても多くの講義を行い、それらの写本が残されている。綱齋の『家礼』講義については、吾妻重二氏編著『家礼文献集成 日本篇九』が参考になる（吾妻 2021）。

### 三、文献解題

#### ○山崎闇齋

##### 一、『周易〔本義〕』（外題『易経本義』）

三卷本義序例一卷 宋朱熹撰 山崎闇齋（嘉）校点 寛政元年（再刻 江戸 須原屋茂兵衛等）大五  
崎九一 漢文 刊本

「順造館蔵書」の印あり。表紙外題には『易経本義』とある。第一巻「易経本義序例」（全二十八葉）、第二巻「易経本義上経」（全四十三葉）、第三巻「易経本義下経」（全四十六葉）、第四巻『易経本義』上

3) 山口春水は、江戸時代中期の儒者。若狭の国、小浜藩士。京都で若林強齋に学び、「強齋先生雑話筆記」を著わす。

下象伝上下象伝（全五十九葉）、第五卷『易経本義』上下繫辭伝、文言伝、説卦伝、序卦伝、雑卦伝（全五十四葉）からなる。

本書は闇斎が『易経本義』として延宝三年（1675）に校点刊行（刊記に「延宝三年乙卯春三月寿文堂刊行」とある）したものを寛政元年（1789）に復刻したものであり、その特色は経文と十翼を分けて朱子の『周易本義』本来の姿に復元していることである。ちなみに寿文堂は京都の書肆である。

なお、闇斎は延宝五年（1677）秋より翌六年春にかけて『易』を講義しているが、おそらくこの和刻本を用いて講義したのであろう。

## 二、『易学啓蒙』

四卷 宋朱熹撰 山崎闇斎（嘉）校点 延宝五刊（京 村上平楽寺）大一崎九二  
全七十八葉 漢文 刊本

「順造館蔵書」の印あり。朱筆で人名や書名には棒線を引いている。また墨筆で欄外と行間に小字で書入れあり（あとに述べる三『著卦考誤』の中の書入と筆跡が似ている）。卷末刊記には「延宝五年丁巳孟夏吉日書林村上平楽寺刊行」とある。

近藤啓吾氏は「『易学啓蒙』は朱子はその易説に本づく卜筮の法を記したものであって、本書は既に明暦二年、村上平楽寺より加訓刊行されたものがあったが（刊記「明暦式丙申年三月吉祥・二条通玉屋町村上平楽寺開板」）延宝二年（1674）、同じく村上平楽寺より一見同板と思はれる同書を、刊記を改めて再刻している（刊記「延宝二年甲寅仲秋日・銅駝坊書林村上平楽寺彫刻」）。…和訓がほとんどそのまま延宝五年刊の嘉点本に用いられていることから見て、恐らく村上平楽寺は、初めて『啓蒙』を発刊した書肆としての立場からその和訓の改正を闇斎に請ひ、その改正新刻本として刊されたものが延宝二年刊本であり、従来『啓蒙』が平楽寺から刊されて来たので、同五年、闇斎自身の刊行書として『啓蒙』を出すにあたって、同じく平楽寺から、但、版式は全くこれを改めて刊行したものが嘉点本『易学啓蒙』であらう（刊記「延宝五年丁巳孟夏吉日書林村上平楽寺刊行」）（近藤 1986: 301）と述べている。

なお、朱熹はみずから『易学啓蒙』について「今觀之、如論河図洛書亦未免有剩語」（『朱文公文集』）（今之を觀るに、河図洛書を論ずるが如き、亦た未だ剩語有るを免れず）とあって『易学啓蒙』は定稿ではなかったようにいっているが、闇斎は「今啓蒙不有剩語、則改正之爾」（今啓蒙に剩語有らず。則ち之を改正するのみ。『文会筆録』七之一）と、改正を加えて刊行したという。

## 三、『著卦考誤』

（書入本）宋朱熹撰 山崎闇斎（嘉）校点 延宝六刊（村上勘兵衛）大一崎二六  
全三十六葉 漢文 刊本

「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印あり。朱筆で句読点、墨筆と青筆で欄外と行間に小字で追記の書入れあり。卷末刊記に「延宝戊午孟春吉且村上勘兵衛彫刻」とある。延宝戊午は延宝六年（1678）闇斎六十一歳である。

『著卦考誤』はもともと『朱文公文集』の中の第六十六所収の一篇であるが、これも卜筮の法を詳しく説明したもので、闇齋はそれを抽出し校訂、訓点をつけて出版したのである。見返しの書き入れ識語に、『文会筆録』七之一にあるのと同じ文章が記されている。

山崎先生曰、先生著著卦考誤見文集、宜与啓蒙並行焉文会筆録。

郭氏、朱書節要註曰、郭冲晦名雍、父忠孝師事伊川、著易説、号兼山、雍伝其学、通世務、隱陝川（一作州）、孝宗朝召不起、賜号順正先生、後又号冲晦先生、又自号白雲、然其学去程門遠甚云。

郭雍著著卦弁疑、專以前一変独掛、後二変不掛玉齋胡氏云。

語類六十七式四板曰、先生因説郭子和易謂諸友曰、且如撰著一事、可謂小小、只所見不明、便錯了、子和有著卦弁疑説前人不是、不知疏中説得最備、只是有一二字錯、更有一段在乾卦疏中、劉禹錫説得亦近、柳子厚曾有書与之弁先生撰著弁、為子和設。

文献通考經籍考曰、著卦弁疑三卷、陳氏曰、郭雍撰。

（山崎先生曰く、「先生『著卦考誤』文集に見ゆを著わす。宜しく啓蒙と並行すべし文会筆録。

郭氏は、『朱書節要』註に曰く、郭冲晦、名は雍。父忠孝は伊川に師事し、易説を著わす。兼山と号す。雍は其の学を伝え、世務に通ず。陝川（一に州に作る）に隱る、孝宗朝召さるるも起たず。順正先生と賜号し後又た冲晦先生と号し、又た自ずから白雲と号す。然れども其の学は程門を去ること遠きこと甚だし云う。

郭雍、『著卦弁疑』を著わす。専ら以らく、前一変は独りを掛け、後二変は掛けずと胡玉齋氏云う。

語類六十七式四板に曰く、「先生、郭子和の易を説くに因りて諸友に謂いて曰く、且如えは著を撰する一事は小小と謂うべし。只だ見る所明らかならざれば便ち錯つ。子和に『著卦弁疑』有りて、前人は是ならずと説く。知らず、疏の中に説き得て最も備わるを。只是だ一二字の錯ち有るのみ。更に一段有りて乾卦の疏の中に在り。劉禹錫説き得て亦た近く、柳子厚曾て書有りて之と弁ず先生著を撰するの弁は子和の為に説く。

『文献通考』經籍考に曰く、『著卦弁疑』三卷、陳氏曰く、郭雍撰と。）

闇齋は、『著卦考誤』を著すにあたって、『文会筆録』七之一に「考誤策図差処退溪正之、見朝鮮本朱子大全是也」（考誤策図退溪正に之を差す処、朝鮮本朱子大全を見る是なり）と李退溪（1501～1570）の朝鮮本の『朱子文集』を底本としたことが書かれている。

『著卦考誤』は同じ版本が、九州大学坐春風文庫にある<sup>4)</sup>。その目録には、「山崎闇齋点、浅見綱齋跋、山本復齋（1680-1730）他頭注書入れ」とあるが、書入れを比較したところ、この小浜本と内容はほぼ同じである。坐春風文庫本には書入れに「山本」の署名や「信義按云々」があるが、小浜本には同じ書入れであるが「山本」の書名はない。それ以外は綱齋の書入れかと思われる。山本復齋は綱齋に入門し、

4) 九州大学坐春風文庫は、アメリカのロックフェラー財団の援助により楠本正繼九州大学教授の斡旋により九州大学の所蔵となった。宋明思想の図書が多く含まれている。九州大学坐春風文庫所蔵の『著卦考誤』の請求記号は坐春風文庫/35/4である。

のち高田未白に垂加神道を学んだ。名は信義、通称は源（原）蔵である。また小浜本には欄外の書入れに「進居謂云々」の語がある。進居とは若林強斎のことである。坐春風文庫本には綱斎の跋文があるが、小浜本にはない。坐春風文庫本の綱斎の跋文を以下に載せる。

著卦考誤、弁明詳悉、実与啓蒙相発、以裨于読易者、而文集所載、錯簡訛字、蓋不眇焉、朝鮮李氏嘗正之、而猶有遺脱、今復反復審訂、以定謄本如此、候他日得原書云

宝永初夏十二日 綱斎謹識

（著卦考誤は弁明詳悉にして、実に啓蒙と相発して、以て易を読む者に裨あり。而して文集に載する所は錯簡訛字、蓋し眇なからず。朝鮮李氏、嘗て之を正すも猶お遺脱有り。今復た反復審訂し、以て謄本を定めること此の如し。他日原書を得んことを候つと云う。

宝永初夏十二日 綱斎謹んで識す

跋文の宝永初夏十二日はおそらく宝永六年四月十二日であり、綱斎は宝永元年（1704）に『易経本義』の講義、宝永四年（1707）－宝永六年（1709）に『易学啓蒙』易学相伝の講義を行っていることからして『著卦考誤』に関してもこの時期に講義したものと考えられる。

#### 四、『著卦考誤』

宋朱熹撰 山崎闇斎（嘉）校点 延宝六刊（村上勘兵衛）大一崎三一  
全三十六葉 漢文 刊本

卷末刊記に「延宝戊午孟春吉旦村上勘兵衛彫刻」とある。印、書入れはない。

#### 五、『朱易衍義』

（若林強斎等説ノ移写書入本）三卷 山崎闇斎（嘉）編校点 延宝五刊（寿文堂）  
大一崎二七 一卷全十八葉、二卷全四十葉、三卷全四十二葉 漢文 刊本

朱易衍義一、朱易衍義二、朱易衍義三の三卷あり。「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。卷末刊記に「延宝五年丁巳初夏吉旦寿文堂刊行」（1677）とある。闇斎六十歳、綱斎二十六歳の時である。朱筆で句読点、訂正があり、欄外、行間に墨筆の小字で追記あり。また「信義按云々」の書入れがある。信義とは山本復斎の名であり、目録に若林強斎等とあることからすれば強斎と復斎の書入れ本である。

『朱易衍義』には闇斎の序文が次のように附されている。

朱易衍義序

易経大全依古易、而啓蒙本義為之大註、撰諸説之足發明経註者為之小註、以程伝収于性理大全通書之次則可也。然乱経文雜伝義、使四聖之易混而不明矣。夫朱子之後今易復行而古易遂亡者備於天台



董氏、而成於大全者實朱子之罪人也。嘉自壯年憂之乃復朱易加倭訓令鏤諸梓以広其伝焉、學者苟能讀此、則知易本ト筮之書、四聖之易各別而程易又別也、不甚難矣。但恐為大全所汨、而不能反其本、於是乎為朱易衍義云。

延宝五年正月垂加翁山崎嘉序

（易經大全は古易に依り、而も啓蒙本義を之が大註と為し、諸説の經註を發明するに足る者を撰びて之が小註と為す。程伝を以て性理大全通書の次に収むれば則ち可なり。然れども經文を乱し、伝義を雜え、四聖の易をして混じて明らかならざらしむ。夫れ朱子の後、今易復た行なわれて古易遂に亡びること、天台の董氏に備まりて、大全に成るは、實に朱子の罪人なり。嘉、壯年より之を憂えて、乃ち朱易に復し、倭訓を加え、諸を梓に鏤ましめて、以て其の伝を広む。學者苟も能く此を讀めば、則ち易は本とト筮の書、四聖の易各おの別にして程易も又た別なるを知ること、甚だしくは難からず。但だ、大全の汨する所と為りて、其の本に反る能わざらんことを恐る。是に於てか朱易衍義を為ると云う。

延宝五年正月垂加翁山崎嘉序す)

闇齋は『程氏易伝』『周易本義』の合刻本である『易經大全』が盛んに行なわれていたことを批判するとともに、古易に復歸すべく『周易本義』を校刊したのであったが、『易經大全』の誤ちを警戒し、『易』が本来、ト筮の書であることを明示するためにさらに『朱易衍義』を著わしたという。

## 六、『朱易衍義』

享和二年中沢昨非齋移写若林強齋等説書入本 大一崎三二  
一卷全十八葉、二卷全四十葉、三卷全四十二葉 漢文 刊本

朱易衍義一、朱易衍義二、朱易衍義三の三卷あり。卷末刊記には「延宝五年丁巳初夏吉旦寿文堂刊行」(1677)とある。「順造館蔵書」の印あり、朱墨の書入れあり。五の『朱易衍義』の書入れに加えて川寫寛正の書入れあり。卷末の識語に次のようにある。

右強齋先生与山本復齋先生会読而所点也 予得之於本齋奥野先生以写爾

癸卯仲冬 川寫寛正謹謄写

享和二年壬戌春 後学中沢昨非齋謹写

（右強齋先生と山本復齋先生と会読して点ずる所なり。予之を本齋奥野先生に得て以て写すのみ。

癸卯仲冬 川寫寛正謹んで謄写す。

享和二年壬戌春 後学中沢昨非齋謹んで写す。）

癸卯仲冬とは享保八年（1723）であり強齋と復齋が会読して加点したテキストを川寫寛正（1755-1811）が奥野本齋から得て筆写したものである。五の『朱易衍義』にはない本文中の書入れに「寛正記」とあることから、川寫寛正が五の『朱易衍義』の朱墨の書き入れを写し、それに自分の書入れを加えたもの

が伝わり、さらにそれを後学の中沢昨非齋が享和二年（1802）壬戌春に筆写したものであるとわかる。奥野本齋は、綱齋に関係の深い奥野一族のうちの一とされる。川寫寛正は、近江大津に生れた漢学者であり、号は栗齋という。中沢昨非齋については未詳である。

## 七、『朱易衍義』

大三崎三三 一卷全十八葉、二卷全四十葉、三卷全四十二葉 漢文 刊本

朱易衍義一、朱易衍義二、朱易衍義三の三卷あり。印なし。書入れなし。卷末刊記に「延宝五年丁巳初夏吉旦寿文堂刊行」とある。五と同本。

## ○浅見綱齋

### 一、『周易本義師説』

存上下繫辭伝 浅見綱齋（安正）講カ 写 大一崎一七〇

上繫辭伝七十一葉、下繫辭伝三十四葉 全百五葉 和文 写本

書付け外題に「上繫辭伝下繫辭伝」とある。「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印あり。本書は『周易本義』についての綱齋の講義で、後の二および三と一連のもの。いずれにも「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。一、二、三の『周易本義師説』は、『周易本義』の本文についての語には「や」の印を右側に書入れたり○で囲んだり朱筆で書入れているがこれは上述した『家礼師説』と同じ方式である。また、欄外と行間に朱墨の小字で書入れがある。

なお「師」の小紙を貼った写本は確認できたものだけでも全部で15冊あり、みな同一人物の筆跡のようである。この人物は、十二の『正義乾坤六子説・変卦反对図・六十四卦相生図』の卷末に「澤田重淵謹写」とある。

### 二、『周易本義師説』

存象象伝 浅見綱齋（安正）講カ 写 半一崎一七一

上下象伝三十三葉、上下象伝三十三葉 全六十六葉 和文 写本

「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。書付け外題に「象象伝師説」「上象伝 下象伝」「上象伝 下象伝」とある。また、欄外と行間に朱墨の小字で書入れあり。

### 三、『周易本義師説』

存象伝文言伝説卦伝序卦伝雜卦伝 浅見綱齋（安正 宝永元年）講 写 半二崎一七二

全二冊 和文 写本

一冊目は表紙外題として「象伝豫ノ卦マデアリ 象伝」の付箋を貼る。全二十七葉。「信尚館」の丸

印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。見返し識語に次のようにある。

蒙引曰、以卦徳積象辞、不曰卦辞而曰象辞、以経文履字兼卦與辞、而象伝則卦名履字、己別解、此只作象辞看也

コレヨリ孔子ノ十翼各別ノサバキナリ前ノ占ノケブライラスコシモマゼナトノイヒワタシナリ

二冊目は書付け外題に「文言伝、説卦伝、序卦伝、雑卦伝」とある。全七十二葉。「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。最後の雑卦伝の末に「凡例」が記されている。巻末に「宝永元甲申歳五月廿五日終」と講義の終了した時期が記されている。宝永元年（1704）は、綱齋五十三歳の時で、この年『易経本義』の講義を終えたことになる。このように、綱齋は経文から十翼まで全部講義したことがわかる。一冊目、二冊目とも欄外と行間に朱筆の小字で書入れあり。

また、末尾に「正徳癸巳十月朔日始操筆於平安室町、而享保己亥五月十六日写畢於堺」と記載がある。正徳癸巳三年（1713年）に京都で筆写し始め、享保己亥四年（1719年）に堺でそれを終えたことがわかるが、筆写者は不明である。ちなみに、綱齋は正徳元年（1711）にすでに没している。

#### 四、『周易本義私考』（外題『浅見先生易経筆記』）

（浅見先生易経筆記）浅見綱齋（安正）写 大一崎一七三

全二十四葉 漢文 写本

内題は『周易本義私考』である。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印あり。

『周易』下経の咸卦、恒卦、遯卦、大壮卦、晋卦、明夷卦、家人卦、睽卦、蹇卦のみについてその卦爻辞と象伝・象伝につき漢文で解説している。

#### 五、『啓蒙補要解〔師説〕』

〔浅見綱齋（安正）〕講 写 大一崎一七四 全五十二葉 和文 写本

内題に「啓蒙補要解」とあり。「啓蒙補要解師説全」の付箋を挟んでいる。印なし。文字の右側に朱筆でと書入れて『易学啓蒙要解』の本文の語であることを示している。また行間に朱筆で「～カ」のように文字の校訂案がある。内容は本図書第一、原卦画第二、明蓍策第三、考変占第四に分かれている。

後述する朝鮮の崔恒らの『易学啓蒙要解』についての講義である。『浅見綱齋先生易学啓蒙補要解師説』として九州大学碩水文庫に同じ内容のものがある<sup>5)</sup>。九州大学碩水文庫本は表紙に「浅見綱齋先生」

5) 九州大学碩水文庫は、平戸藩の儒者楠本碩水の旧蔵書で、碩水の兄端山の孫にあたる楠本正継教授の斡旋により九州大学の所蔵となった。宋儒性理の書や崎門派の著述を中心とする。『浅見綱齋先生易学啓蒙補要解師説』の請求記号は碩水文庫／エ／18である。

と書かれているが、書写地、書写者については不明である。小浜本は、本図書第一が十二葉、原卦画第二が三十葉、明著策第三が八葉、考変占第四が四葉である。

なお、この講義は十八『易学啓蒙講義』の際になされたものかと思われる。

## 六、『朱易衍義〔講義〕』

三卷〔浅見綱斎（安正）〕講 写（〔小野鶴山〕） 大一崎一七五 全五十七葉 和文 写本

「信尚館」の丸印あり。朱墨の書入れあり。見返しに「鶴山先生親筆」とあるので小野鶴山の自筆であることがわかる。朱易衍義序、朱易衍義一、朱易衍義二、朱易衍義三に分かれている。『朱易衍義』の本文中の語には「や」を右側に書入れたり○で囲んだり朱筆で書入れている。また書名や人名の右側に朱筆で棒線が引いている。小野鶴山（1701-1770）は江戸時代中期の儒者である。京都で若林強斎に学んだ。強斎が没後娘婿となった。のちに小浜藩につかえた。名は道熙<sup>みちひろ</sup>。通称は平蔵、忠市郎である。

本書には綱斎の序がついており、その最後に「此書ハ山崎先生ノ易ヲ講ゼラル、時、薛文清ノ説ヲヨセテ、一処ニセフトアルカラ、ソロソロト出来テ、此様ナ結構ナ書ニ成タ。正月七日、是ガ易ノ吟味ヲシソメノ日故、此日ヲ取ラレタゾ」とある。

## 七、『啓蒙著数諸図』

浅見綱斎（安正）写 大一崎一七六 全十八葉 漢文 写本

「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。見返しに「綱斎先生」と大書されている。内容は「啓蒙正図法」「蔡氏四十九著虚一図」「近世後二変不掛図」に分かれている。

巻末に「延宝庚申七月二十二日安正謹書」（1680）（綱斎二十九歳）とあり、続いて、

「愚既著前説、頃得朱子遺書所列啓蒙校之、所疑第二変奇数図、如予説、蓋朱子旧本如此、伝写誤倒之耳、但世伝本率如此、故且存余前説以備考訂云、元禄辛巳十二月記」

（愚既に前説を著わす。<sup>このこ</sup>頃ろ朱子遺書列する所の啓蒙を得て之を校す。疑う所の第二変奇数の図は正に予が説の如し。蓋し朱子の旧本此の如し。伝写誤て之を倒するのみ。但だ世の伝本率ね此の如し。故に且く余が前説を存して以て考訂に備うと云う。元禄辛巳十二月記す。）

とある。綱斎は延宝八年（庚申1680）に著わした『啓蒙著数諸図』を元禄十四年（辛巳1701）に校訂したのである。これによると、綱斎は『朱子遺書』所収の『易学啓蒙』を入手して確認したところ、自らの校訂が朱熹の旧図に合致していたことがわかったという。この時、綱斎は五十歳である。

なお九州大学坐春風文庫蔵の『易説備考』<sup>6)</sup>に収載される「啓蒙正図法」は本書と同じであるが筆者が異なる。

6) 九州大学坐春風文庫蔵の『易説備考』の請求記号は坐春風文庫/35/188である。

#### 八、『薛氏易要語・薛氏画前易説』

〔浅見綱斎（安正）〕 輯 写 半一崎一七七 全十葉 漢文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

薛瑄の著書『読書録』『読書統録』から綱斎が集めた抜粋文である。薛瑄（1389～1464）は、明代の思想家薛瑄で、ここではその『易』に関する資料を集めている。綱斎にとって薛瑄の易説はきわめて重要な意味を持っていたらしい。「薛氏易要語」は末尾に「以上三十八条」と記すが、実際は三十九条である。「薛氏画前易説」は十条からなる。九州大学坐春風文庫蔵『易説備考』にも同様の文献が収められ、こちらは「易学啓蒙（啓蒙考証）」「易類説」「薛氏易要語」「原卦画」「薛氏画前易説」からなるが、小浜本が底本となった可能性がある。

#### 九、『繫辞伝参伍考証・[易学啓蒙考証]』

〔浅見綱斎（安正）〕 輯 写 半一崎一七八 全十一葉 漢文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

冒頭に『荀子』議兵篇、『韓非子』備内篇、楊権篇、『史記』蒙括伝、太史公自序伝、『前漢書』趙広伝に見える参伍に関する記述を集めて載せている。次に『易学啓蒙』に所載されている文章、熟語、単語、人名等について『礼記』、『漢書』、『尚書』、『周礼』、『文献通考』、『啓蒙伝疑』、『史記』、『春秋左氏伝』などの文献を引用して解説している。

#### 十、『易類説』

〔浅見綱斎（安正）〕 輯 写 半一崎一七九 全八葉 漢文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

『朱文公文集』卷第四十四の「答蔡季通」と同卷第四十四の「答方伯謨」からの抜粋、および同卷第六十七の「易象説」全文載せている。

#### 十一、『浅見先生易師説外題』

浅見綱斎（安正） 輯 写 半一崎一八〇 全五葉 漢文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。「過揲二十八策」、「過揲二十四策」、「過揲三十六策」、「過揲三十二策」、「五歳再閏図」を載せている。初めに「李滉看詳」の四文字が双行注として記されている。

#### 十二、『正義乾坤六子説・変卦反对図・六十四卦相生図』

〔浅見綱斎（安正）〕 輯 写 半一崎一八一 全十八葉 漢文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。見返し冒頭に「表紙ノヲニ／反対ノコト玉弼略例九丁ヲニ有可考」とある。「正義乾坤六子説」「変卦反对図」「六十四卦相生図」に分かれており、巻末に「享保十三戊申初冬九日 澤田重淵謹写」とある。綱斎の死後、享保十三年（1729）に筆写されたものである。

筆写者の澤田重淵（1701-1782）は、江戸時代中期の儒者、出版者。京都の書肆風月堂の主人で、儒学を若林強斎に学び、日本の古典などの写本を残したほか、多くの學術書を出版した。通称は風月庄左衛門。号を一斎、奚疑斎という。

### 十三、『卦変諸説』

浅見綱斎（安正）輯 写 半一崎一八二 全十八葉 漢文 写本

「信尚館」の丸印、「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

『朱文公文集』、『朱子語類』、『周易本義』、『易経大全』などから卦変に関する論説を集録している。本書の跋文「書卦変諸説後」に、

「延宝庚申夏、読易再考序例卦変図、反覆朱子文集語類数説、似得其旨、因悉標出、并与正義程伝及易経大全諸儒之説録為一卷、且記所考于後云」

（延宝庚申夏、易を読みて序例卦変図を再考し、朱子文集・語類の数説を反覆して、以て其旨を得るに似たり。因りて悉く標出し、并に正義程伝及び易経大全諸儒の説と録して一卷と為し、且つ考る所を後に記すと云う）

とある。跋文の末尾に「六月十八日浅見安正謹識」とある。綱斎は延宝八年（庚申1680）に本書を著したことがわかる。巻末には「宝永戊子二月朔日 若林進居謹写 享保戊申七月十四日 澤田咸熙謹写」とある。宝永五年（戊子1708）強斎三十歳の年に写したものを享保十三年（戊申1729）に澤田咸熙が転写したものである。澤田咸熙については未詳であるが澤田一斎かと思われる。

### 十四、『易学啓蒙序〔講義〕』

浅見綱斎（安正）講カ 写 半一崎一八三 全二一葉 和文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

近藤啓吾氏は本書について、「朱子の『本義』『啓蒙』、および闇斎の『衍義』の易学上に於ける地位を評価し、それによって闇斎の功績を述べたものとして注目すべき内容を持つ言」と述べ、「『潔静精微』の四字をもって朱易の真粹とし、易道の本原としている」（近藤 1986: 303）と記している。以下、本書で「潔静精微」について述べている部分を引用する。

我国古ヨリ易道易道トイヘドモ、古註ノ韓康伯・王弼ヲマゼテ伝授ジヤト云。易書ヲトクトミレバ、『易伝』ト『本義トマゼタ本デ読ミ、『啓蒙』ジヤト云テムチャムチャト取合シタルマデノコトナルニ、山崎先生ノ出生ナサレ、終ニ我国ニテヒラケザル朱易ノ真粹、潔静精微ノ血脈ヲ得ラレ、『啓蒙』デナケレバ易デナイト知りヌイテ、凡『本義』ヲ読モノ、根本ノ台所、山ノ真金、水ノ源ハ此書ニアルトシラサレシゾ。朱子モアマリノコトニ序例ヲ立テ易ノ本園大綱ヲシラサルレドモ、本末終始叩テ竭シタルハ此書ノヤウナルハナシ。此書反復シテキカサウトテ『朱易衍義』ヲ著サルル。潔静精微ノ書ジヤト易道ノ本原ヲ知サウトアルコトゾ。ヌシノ晩年ニ癱ヲ病ハレテ、一生ノ中、易学相伝ナサレタキトアリ。正月六日、手前ヲ召シ相手ニナレトアルコトデアリシゾ。幸ニ病氣ヲ本復ナサレ、『朱易衍義』モ出来ス。『本義』以来、『朱易衍義』ノヤウナ『啓蒙』ヲ発シタル書ハナイゾ。

闇齋が『朱易衍義』を出版したのは延宝五年（1677）のことであり、綱齋はすでにその年には入門して闇齋の講義を聞いていたらしく、ここにはその講義の様子が記されている。また本書の中で「手前の以前詠ぜし詩に」として、綱齋の次の詩を載せている。この詩は後述するように、十六、『易学講習別録』にも見える。

「纔説易時既是易、不須床上更疊床、伏羲以後寂寥矣、千載忽看朱紫陽」  
（纔かに易を説く時既に易ならず 床上更に床を疊ぬるを須いず 伏羲以後寂寥たり 千載忽ち看る 朱紫陽）

ここにいう「朱紫陽」は、いうまでもなく朱熹のことである。

#### 十五、『[易学] 筆記・顕諸仁蔵諸用』

〔浅見綱齋（安正）〕 講 写 半一崎一八四 全十葉 和文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。「筆記」四葉、「顕諸仁蔵諸用」四葉。

「筆記」は冒頭に「天尊地卑云々」とあり、繫辞上傳第一章「天は尊く、地は卑くして、乾坤定まる」についての講義である。朱筆で行間に書入れあり。

「顕諸仁蔵諸用」は繫辞上傳第五章「諸を仁に顕わし、諸を用に蔵し、万物を鼓して、聖人と憂いを同じうせず。盛徳大業至れるかな」についての講義である。

#### 十六、『易学講習別録』

〔浅見綱齋（安正）〕（宝永四～六年） 講 〔若林強齋〕 筆録 写 半一崎一八五  
全二十九葉 和文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。宝永四～六年（1707～1709）は綱齋五十六歳から五十八歳の時であり、その際の講義を強齋（二十九歳）が筆録したものである。

本書の冒頭に十四の『易学啓蒙序講義』に見える詩とほとんど同じ詩が載せられてる。

「纔説易時既是易、不須床上更疊床、伏羲千載無消息、莞爾忽呼朱紫陽  
右先生詠易詩  
無辺風月眼中眼、不尽乾坤燈外燈、柳暗花明十萬戸、叩門処々有人膺  
コレ即易ナリ山崎先生ノ仰ラレタルコトナリ」

また文中には講義の順序やその際の服装、講義の謝礼といったことまで詳しく書かれて興味深い。次の例がそうである。

「右三月廿一日夜、啓蒙徑一圀三ノ段講習訖、先生親カラ図シテ説示セリ」

「初会固より沐浴礼服明朝礼服参礼本図書初会礼服明朝礼服参礼本図書終明朝参礼セズ原卦画ノ初（始）メ礼服明朝篇首ノ御礼申上ル」

「十一月十七日啓蒙講習訖ル先生又座鋪へ御出有之仰ラルルハ易ノ筮法ハ上下経ニ尽タリ十翼ハ理ヲ以テトカルル各別ナコト其易ノ易タル精微ハ啓蒙ニ尽テアリ随分ト此書ヲ熟読セヨ補要解伝疑ナドヲ以テ反復センギセヨソレニツキ云テキカスコトアリ補要解伝疑ヲ講習スルト云ト本書ヲ難スルニナルユエ一分一分ギンミセヨ相応相応ニ其旨ヲ明シテキカサフゾ十八日朝四人一所ニ啓蒙全部終御礼申上ル先生御出御目ニカカル其後連中トシテ為御礼金二百匹酒五升但大鼓樽進上ス即惣代トシテ手前参上ス先生御逢ナアサレ御祝儀トアリテ御盃下サル荘太郎殿ニモ盃致ス様ニト仰ラルルユエ進上ス其上仰ラルルハ我百年ノ後直ニ得伝ヘズバ何レモ荘太郎へ伝ヘラレヨ預ケ置ホトニトノ御意ナリ其上益々吟味致シ熟スベキヨシ仰セ渡サルルナリ」

「四月十二日上係辞終ル今日著卦考誤ノ改本ニ跋ヲナサレ下サルル上係辞モ終ル故ソレユエ跋モカイタトオオサラレタゾ」

「易学相伝ノ講習全体宝永四年丁亥二月十一日発端宝永六年己丑五月十四日ニ訖ル勿論髮月代水礼服ニテ罷出テ先生ニモ月代礼服ニテ御出ナリ雜卦伝今日ノ講ナリ相ヲハリテ熨斗昆布下サレ仰ラルルハ書付ヲ致シヲキ蔵ヲクベシ其上勝太郎殿ニ仰ラルルハ汝ニ易学相伝ニ不及ハ吾百年ノ後原蔵新七ニ伝ヘヲク再伝スベシ其上御盃出頂戴御吸物出ルソレヨリ罷帰御礼ニ罷出ル云云」

「同十五日ニ小関微妙寺寓居ニテ右ノ祝イタス桑本惣十郎來リ酒一樽贈ル 以上」

これらの記述から、綱齋は『易学啓蒙』を宝永四年（1707）二月十一日開講し、十一月十七日に終わり、引き続いて『易』の講習を始めたことがわかる。「四人一所ニ」云々というその四人とは強齋、復齋の二高弟と他の二人（本文から長田養庵と山科道安であることがわかる）のことで、彼ら四人に対してこうした「易学相伝」の講習を行い、二年余りを費して完了し宝永六年（1709）五月十四日まで行なわ



れた。ここに出てくる勝太郎とは綱斎の兄道哲の子に当たる甥の浅見勝太郎のことである。また原（源）蔵とは山本復斎のことであり、新七とは若林強斎のことである。

本書の内容から、これは『易経本義』『易学啓蒙』『伊川易伝』『周易本義』『朱子語類』の中の『易』に関する箇所、『朱易衍義』『著卦考誤』『文会筆録』『程子遺書』の易に関する箇所を講義したものである。

この講義については強斎の『常話筮記』に記録が残っており「正月四日、周易御伝授ノ願ヲ申上グ無余義分御承引ニテ御許容被成、夫ヨリ罷り帰り沐浴シテ礼服シテ御礼申上グ、コレヲ願ノ云入ニスルゾ、易ノ相伝血脈全ク啓蒙ニアルト仰セラルルゾ。」（近藤・金本 1989: 523）とある。その講習の開始に先だって、四名に対して述べた受講の心得が『常話筮記』に次のように記録されている。

「易学ハ學術ヲ以テ説カウヤウモナク、其ノ血脈ニナリテハ、程子トイヘドモタガウタルホドノコトゾ。ソレユヘテ簡發明出テガイヤスキゾ。ソレユエサヤウナル者トミレバ相伝ヲユルサヌコトゾ。ソレユエ其正意血脈ヲ某ガ云通りヲカタク相守ト云ガ第一ゾ。（中略）右云通り此書ハ學術ヲ以テ説カウヤウモナイ、造化自然ノ本然理ヲアカスコトユヘ、ミヂンマジリアルトモハヤソデナイゾ。吾百年後ニモ、此書ニ於テ了簡發明ヲ出スト、吾地下ニ於テモ本意ナラズ、モハヤ伝授ハ断タトオモヘ。発端十一日夜ニスベシ。尤沐浴上下ニテ、サテ書ヲ直ニタ、ミニヲカヌヤウニスベシ。一篇一篇ヲハリゴトニ、礼服ニテ出ベシ。其外ハ平生ノ通りゾ。何モ退出シ、追付御礼ニ参リ候。」（近藤・金本1989：525-526）

これらの記録から、この講義の伝授がいかに重要であったかを読み取ることができる。

もう一つ注意されるのが、ここで「補要解」「伝疑」がとり上げられていることである。前者は、朝鮮・崔恒撰『易学啓蒙要解』、後者は同じく朝鮮・李滉撰『啓蒙伝疑』である。『易学啓蒙要解』については「その他」の一と二を見られたい。『啓蒙伝疑』については酒井家文庫蔵ではないのでここでは取上げないことにする。

## 十七、『易諸説』

浅見綱斎（安正）輯 写 半一崎一八六 全二十一葉 漢文・和文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。「師」の字を記した小紙を表紙右上に貼っている。

易学に関する綱斎の諸説を集めたもので、途中に「庚午九月 安正識」や「延宝七年己未四月二十五日安正謹書」とある。庚午九月は元禄三年（1690）九月のことで綱斎三十九歳の時で、延宝七年（1679）は綱斎二十八歳の時であり、時代が錯綜している。

## 十八、『易学啓蒙〔講義〕』

浅見綱斎（安正 元禄一三～一五年）講カ 写 大二崎一八七 全一八三葉 和文 写本

「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。易学啓蒙序の終りに以下の識語がある。

「綱齋先生講是書始于元禄十三年庚辰冬十月八日夜、終于十五年壬午三月八日夜、其間兼補要解著卦考誤而解之」

(綱齋先生、是の書を講ずるは元禄十三年庚辰冬十月八日夜に始まり、十五年壬午三月八日夜に終わる。其の間補要解、著卦考誤を兼ねて之を解す。)

元禄十三年(1700)は綱齋四十九歳の年である。『易学啓蒙』講義の途中で『易学啓蒙補要解』(後述)、『著卦考誤』についての講義を行なっている。

易学啓蒙序について本図書第一、原卦画第二、次に周惇頤の『通書』精蘊第三十についての解説がある。さらに明著策第三、『著卦考誤』の解説について、考変占第四と続く。

ここで綱齋が『著卦考誤』とともに『通書』精蘊第三十に関する講義をはさんでいるのは『通書』のこの章が聖人の画卦について述べ、朱熹の注にそれを「精微」の語で説明していることに関心を惹かれたのであろう。また識語にいう『易学啓蒙補要解』の講義は五の『啓蒙補要解師説』がそれに相当するのではないかと思われる。

#### 十九、『繫辞伝参伍考証』

合〔易学啓蒙〕筆記・〔易〕筆記(浅見綱齋撰)・題未詳・著卦考誤左数右策左右皆策説・著卦考誤著図辨・河洛五行叢説(浅見綱齋撰)・易学講習別録(若林強齋録)・書卦変諸説後(浅見綱齋撰)・十二木占法・洪範占法筆記(友部止定齋撰)写 大一崎一八九 五十九葉

「繫辞伝参伍考証」二葉 漢文、「筆記」四葉 和文、「題未詳」五葉 漢文、「著卦考誤左数右策左右皆策説」一葉半 漢文、「著卦考誤著図辨」四葉半 漢文、「河洛五行叢説」四葉 漢文、「易学講習別録」十四葉 和文、「書卦変諸説後」五葉 漢文、「十二木占法」五葉半 和文、「洪範占法筆記」十一葉 和文、すべて写本

「信尚館」の印、「山口平姓蔵書」のあり。

「繫辞伝参伍考証」は一七八の「繫辞伝参伍考証」と同内容であるが筆者が異なる。

「筆記」は一八四の「易学筆記」と同じであるが筆者が異なる。卷末に「右綱齋先生嘗自書所以示於人者如此也 因謄写所伝如右 享保十二歳孟冬五日 謹録」とある。

「易学講習別録」の最後に「右易学講習別録強齋先生所録也」とある。これは、十六の「易学講習別録」と同じものであるが筆者が異なる。

「書卦変諸説後」は一八二の「卦変諸説」の跋文と同じものである。

「洪範占法筆記」は最後に「享保二年丁酉暮春 友部安崇識」とある。友部(伴部)安崇(1667-1740)は江戸時代中期の神道家。佐藤直方に崎門学を、跡部良顕に垂加神道を学ぶ。

○その他

一、『易学啓蒙要解』（外題『易学啓蒙補要解』）

（山口風簷書入本）存卷一・四版心作六 大三崎四六五 漢文 刊本

書名について、卷一末と卷四末では「易学啓蒙補要解」とする。

一冊目は、卷一で全四十四葉。「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。見返しに朱筆の書入れあり、『朱文公文集』続集二「答蔡季通書」を抄写する。また墨筆での書入れの最後に「えん」と書かれていることから、本書は、山口風簷が書入れしたものかと思われる。

二冊目は、卷四後半で四十八葉。「山口平姓蔵書」の印、「若州邸学」の印あり。この二冊目は「易学啓蒙要解卷之四」の途中から始り、「易学啓蒙要解卷之二」「易学啓蒙要解卷之三」「易学啓蒙要解卷之四」の前半は欠けている。『酒井家文庫総合目録』では卷三末を存卷としているが、正しくないため訂正した。伝わるのは卷一と卷四の後半のみである。また本冊は版心では卷数を「六」と記し、表紙題箋でも「六」と記している。朱墨で欄外と行間に小字で書入れあり。朱筆書入れはあとの二の『易学啓蒙要解』とまったく同じで、山本復斎の書入れを転写したものらしい。さらに二冊目にも墨筆の書入れがあるが、これも山口風簷の書入れと思われる。

一冊目二冊目ともに本文に朱筆で「や ○ や棒線の書入れがある。

本書は李氏朝鮮の第七代国王、世祖（1455～1468）の命により、国王の撰に係る要解に儒臣崔恒・韓継禧所撰の補解をあわせ、『易学啓蒙（補）要解』として崔恒らがこれを撰したものであり、末尾にはその経緯を記した崔恒跋文が載せられている。

二、『易学啓蒙要解』

（沢田一斎書入本）四卷版心作六卷 朝鮮世祖命撰〔江戸前期〕大二崎四七三 漢文 刊本

一の『易学啓蒙要解』と同版で全四巻が揃っている。書名については、一の『易学啓蒙要解』と同じく、卷一末と卷四末では「易学啓蒙補要解」とする。澤田一斎の書入れ本であることは確認できない。

一冊目は卷一と卷二を収める。全百二十四葉。「順造館蔵書」の印あり。墨筆の書入れが多いが、一の『易学啓蒙要解』の朱筆の書入れとまったく同内容であり、これは一が二を転写したものと思われる。本文には朱筆で「や 棒線の書入れもある。

二冊目は、卷三と卷四を収める。全百三十三葉。「順造館蔵書」の印あり。墨筆で欄外と行間に小字で書入れあり。また本文に朱筆で「や ○、棒線の書入れあり。

おわりに

酒井家文庫所蔵の山崎闇斎と浅見綱斎の『易経』に関する著述だけでもこれだけの冊数があるのは、彼らがいかに易学研究に情熱を傾けていたかをよく示している。その易学関係の著述を小浜藩ではよく保存し、それが現在に伝わっているのである。また、この文献解題を通してわかるのは、綱斎ら師の口

調、言い癖、方言などをそのまま記していることで、これは崎門派の講義の特色をよく伝えるものとなっている。しかも綱斎の『易』に関する著述は出版されず、写本でのみ残されており、綱斎の口述を弟子が筆録したものを次の弟子がまたそれを転写、書入れするという形で残されており、崎門派の学統のあり方をはっきりと示している。

崎門派の『易』に関する資料は、酒井家文庫本だけでなく、名古屋市蓬左文庫、九州大学附属図書館 碩水文庫・坐春風文庫などにも弟子たちが代々継承した写本がおびただしく存在する。今回はそれらの中の一部ではあるが貴重な資料群について書誌的な整理を加えることができた。綱斎の『易』に関する資料としては酒井家文庫のみに存在するものも多く、ここでしか見ることのできない重要な文献群といえよう。

今後はこれらの文献を繙読、分析、整理することで、闇斎や綱斎の易学思想とは何であったのか、それは朱熹の易学や朝鮮の易学と比べてどのような特徴があるのかなど、これまであまり論じられてこなかった問題を考察していきたい。また易学のみならず、崎門派の思想や学統、影響の広がりなどは、なお研究の余地を多く残しているが、本稿が今後の考察への一助となれば幸いである。

最後になったが、これらの資料の貸出、撮影にご協力いただいた小浜市教育委員会・文化課、小浜市立図書館の方々に感謝申し上げたい。

[資料]

- 吾妻重二（編）（2021）『家礼文献集成 日本篇 九』吹田：関西大学出版部  
近藤啓吾・金本正孝（編）（1989）『浅見綱斎集』東京：国書刊行会  
日本古典学会（1978）『新編 山崎闇斎全集』東京：ペリカン社

[目録]

- 阿部隆一（1985）「大倉精神文化研究所蔵 崎門学派著作文献解題」（『阿部隆一遺稿集』第三巻）東京：汲古書院  
小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』（1987）  
小浜市立図書館『酒井家文庫総合目録』付録二「印記集」（1987）  
九州大学附属図書館（1994）『九州大学附属図書館漢籍目録』  
全寅初（主編）（2005）韓国所蔵 中国漢籍總目 ソウル：學古房  
長澤孝三（編）（2011）『改訂増補 漢文學者總覽』東京：汲古書院

[研究文献]

- 吾妻重二（2004）『朱子学の新研究』東京：創文社  
近藤啓吾（1970）『浅見綱斎の研究』京都：神道史学会  
近藤啓吾（1979）『若林強斎の研究』京都：神道史学会  
近藤啓吾（1986）『山崎闇斎の研究』京都：神道史学会  
榊原篁洲講述（1928）『易学啓蒙諺解大成』漢籍国字解全書 東京：早稲田大学出版部  
澤井啓一（2014）『山崎闇斎 天人唯一の妙、神明不思議の道』京都：ミネルヴァ書房  
傳記學會（1938）『山崎闇斎と其門流』東京：明治書房